

平成20年度

研究だより

南部小学校

H20. 7. 28

No. 1

<兼 子>

第1回授業研究会（6月18日）ご苦労様でした。

学校研究を下学年ブロックと上学年ブロックに分かれて、研究主題「生き生きと学び合う子どもの育成」に迫ろうとしています。学校全体のものにしていくために、研究だよりを発行していきたいと思えます。

まず、授業研究を仮説の面から検証してみましょう。

<研究の仮説>

【仮説1】（子どもの側に立った学習のあり方）

児童一人一人の持つ思いや疑問・感想・問題意識を基にした課題を子どもが自分で見出す工夫をすることによって、意欲的な学習姿勢と主体的な学習を促すのではないか。

【仮説2】（子どもが生きる学習のあり方）

児童一人一人が考えを出し合い、互いに学び合うことによって、一人一人が生かされ、自分の考えを深めることができるのではないか。

2年3組・算数科・「テープ図をかいて、かくれた数をみつけよう！」

渋谷登志美先生の授業から学ぶ

<成 果>

【仮説1について】

- ・問題場面が「魔法の学校」ということから、魔女からの出題という設定もとに、魔女の帽子をかぶって雰囲気作りしたことが、子どもたちにとっても興味をもち意欲的に臨めた授業であったのではないだろうか。
- ・数量関係をしっかりと持たせるための手立てとして、分かっていること・聞かれていることは何かをはっきりとさせ、その上で一人ひとりにブロック操作させるなどの工夫がなされていた。

【仮説2について】

- ・自分の考えと友達の考えネームプレートを貼って比較し、似ている考えや違いに気づかせていった。また、なかなか挙手できない子にとって、一人ひとりの考えを表す手段と

して有効だったのではないだろうか。

- ・今日の授業での光る言葉は、「まきもどし」という言葉の場面であった。帰った人がもどってくると、はじめの数になることから、子ども達が納得していったようである。

<課題>

- ・問題場面に生活場面を取り入れる方法もある。
- ・間違えた問題を話し合いに生かす場面もあるとよかった。また、間違えた式の検討として、もう一度問題場面にもどって考えさせる必要がある。
- ・自分の考えを説明することにより、学び合いへと生かしていけないか。さらに説明できる力をつけていく必要がある。
- ・具体物を使って分からない友達に教えることや、ブロックを使って自分の式を確かめるようになるとよいのではないか。

4年1組・算数科「回転量としての角を考える力をつけるために」

阿部宏子先生の授業から学ぶ

<成果>

【仮説1について】

- ・ロケットが飛んだ回転角を調べるというゲームを通して、自分の角の必要感を持たせることができ興味をもたせることができたのではないだろうか。
- ・「分からない」と言える授業の雰囲気づくりが見られ、子どもに寄り添う言葉かけがなされていたことにより、自分自身の課題を何とかして解こうという意欲が持続していったのではないだろうか。

【仮説2について】

- ・「隣の人に教えてあげて」と言って、すぐに活動できたのは、日頃の授業から取り組んでいた成果だったのではないだろうか。
- ・自分の三角定規だけでは問題解決できない（3つ以上の三角定規で角を測る）場面を設定したことにより、自然と友だちと協力しながら課題を解決しようという姿勢が生まれてきたのではないだろうか。

<課題>

- ・角を測る際の基準としてのスタート位置をしっかりと把握させてから考えさせる必要があったのではないだろうか。
- ・なぜペアを組むのか、「3つ三角定規を使いたい時どうするの？」など、算数的活動を子ども達で作っていく必要がある。
- ・最初の導入であるゲームで作った自分の角を、最終的には振り返る活動（結果を確認する時間を保障してやる）が、必要だったのではないだろうか。
- ・三角定規は透明なものでないと、教材として使用しても適当でないことがある。
- ・「いろいろ工夫しましょう。」のいろいろとは何か事前に検討しておく必要がある。